

# インターネットで福音を伝えるということ

土 屋 至

## Evangelization by means of Internet

Itaru TSUCHIYA

I have been a teacher in Catholic highschool teaching religion and information technology. Through that experiences I got interested in Good News in the Internet world accessed with highschool students.

After my retirement of that highschool my concern was developing to "Evangelization by means of Internet".

I have three visions now. Those are Catechetical Course opened in internet, the Memorial and Mourning site for the deceased, and Meditation and Sharing site. Especially the Memorial and Mourning site will be opened this spring.

### 要 旨

私は、カトリック系の中高で「宗教」「倫理」「情報」の科目を担当してきた。その経験をとおして生徒とともに「インターネットがもたらす福音」について考え続けてきた。

中高の教員を退職したあと私の関心は「インターネットによる福音宣教」へと発展した。とくにソーシャルネットワークの特質を福音宣教のためにどう生かすかということに注目している。

私は今3つの構想を描いている。一つは亡くなった人をインターネット上で顕彰・追悼する「故人追悼サイト」であり、二つ目はインターネット上で展開する「キリスト教入門講座」であり、三つ目は瞑想と分かち合いのサイトである。

### 福音のセールスマン

わたしは清泉女学院中学高等学校で「宗教」の授業を担当する倫理科教員として1985年から2008年まで23年間奉職してきた。ところが学校に勤めたときの最初の仕事は「成績処理プログラム」の構築であった。おどろいたことにそこにはすでにBASICで組んだ成績処理プログラムが稼働して数年経っているという。たった3行の液晶表示のディスプレイと感熱紙のプリンターというシステム構成であった。

わたしは根っからの文系人間でコンピューターについて勉強したこともないのだが、前の印刷会社に勤めていたときに業務のシステム設計を行い、さらにはオフコンのシステムを販売するセールスの仕事をしていたので、その経歴をたよりに、わたしは成績処理システムを漢字が使えるようにアップグレードする仕事を命じられたわけである。

恐いもの知らずというか、無鉄砲というか、わたしはその仕事に嬉々として取り組んで、3年くらいかけて中学入試から大学進学までを一貫するトータルな成績処理システムとして作りあげた。といってもわたしがSEやプログラマーの仕事をしたわけではなく、それは九州の小さなシステム設計の会社に発注した。その会社の優秀なシステムエンジニアに恵まれたことも幸いした。

そしてそのシステムは、おどろくことにわたしが学校を退職する直前までの20年以上稼働し続けた。この技術革新の激しい分野で一つのシステムが20年間も稼働することはほとんど奇跡に等しいことであった。ハードやOSのアップグレードとともに古い機種やシステムはすぐに使えなくなることはこの世界ではごく普通のことであった。

最後の1年は20年間働き続けた成績システムをネットワーク対応のものにするためのシステムのリプレースの仕事であった。かくしてわたしの教員生活は成績処理システムに始まり、成績処理システムにおわるという皮肉な結果となった。

わたしはオフコンをセールスしていたときに考えたことがある。コンピューターはある業務にはとても有益な働きをする。そういう点で一部の業種には「Good News (福音)」であろう。ところがセールスのためにいろいろな会社を訪問すると、高価なシステムを導入したが、うまく動いていないというケースにもよくであった。こういうところにはコンピュー

ターはちっとも「福音」とはなっていない、それが分かっているながらもセールスを続けることに疑問を持つようになっていた。まだパソコンのシステムは仕事には使えなかったときである。

いつか、わたしはどうせ売り歩くならほんものの「福音」を売り歩きたいものだという願いを持つようになり、それは「宗教」を学校で教える教員になることによってかなったのである。

### Mac エバンジェリスト

成績処理システムが完成したころ、学校は生徒にコンピューターを学ばせようということになり、情報教育のおはちがわたしのところに回ってきた。コンピューターに詳しい教員は他にいたのだが、そういう人ではなく、根っからの文系人間であるわたしがまたも命じられた。コンピューターは理系のものという観念から自由になった文系のコンピューターという発想がとくに女子校には必要だったようである。

こうしてほとんどコンピューターの経験のない教員たちが情報教育委員会をつくって機種を選定とカリキュラムの作成をはじめることとなった。そしてその仲間たちといろいろなコンピューターの展示場を歩き回ったりしていくうちに出会ったのがアップル・コンピューターである。1992年のことである。そのときスティーブ・ジョブズはアップルからは離れていて、マッキントッシュ（以下 Mac と呼ぶ）はマイクロソフトに頼ってかろうじて命脈を保っていたアップルの冬の時代であった。

委員会の仲間たちはその Mac に一目惚れをした。女子校のパソコンはこれだと衝動買いをした感じである。学校には Mac を使っている教員は誰もいなかった。今から思えば無謀な選択をしたことになるが、ほとんど不安を感じなかった。

Mac の世界には Mac エバンジェリストを自称する人たちがいた。エバンジェリストとはキリスト教用語で、福音を伝えるものという意味である。つまり Mac のよさを吹聴することを自分のミッションとしている人である。私たちが Mac に機種決定をしたときにある代理店の人は「それはよい選択をした。Mac を導入するということは単にハードやソフトのシステムを導入することにとどまらず、その周辺にあるソフトのソフトや文化を構成するネットワークに加わることなんだ」といつてくれた。

Macのエバンジェリストたちのサポートはとても心強かった。その勉強会や発表会に足繁く通って、多くのエバンジェリストを知り、そしてその助けを得た。システムが動かなくなったり、壁にぶち当たったときに彼らはすぐに駆け付けてくれた。まったくのボランティアだったのである。学校の職員研修会の講師にも何度もお願いして、Macをつかった授業をどのように展開したらいいかという知恵を授かった。

生徒たちもMacを歓迎した。自由に使えるコンピューター教室は席の取り合いが続くくらいの人気があった。特に熱心にコンピューター教室に通ってきたのはイラスト研究会と器楽部ビオラパートの生徒たちであった。お絵かきソフトと音楽ソフトを使って熱心に絵を描いたり、音楽を奏でたりした。Macを入れて本当によかったと思った。生徒たちは「うちの学校はMacだよ」というとほかの学校に行っている友だちからうらやましがられるとうれしそうに語っていた。

コンピューター教室にいきりびたる生徒というのは、あまり人間関係を作るのにうまくない生徒が多い。一人黙々とパソコンに向かっていく場面が想像できるのだが、Macの部屋は違った。パソコンがフリーズしたときにどうしたらいいかなどについて学年を越えて教えあう姿がよく見られた。下級生が上級生をおしえるというのも何の不自然さがなかった。かくしてコンピューター教室には学年を越えたコミュニティができあがった。

「ぶよぶよ」というゲームソフトが蔓延したことがある。ゲームをすることは禁じてはいなかったが、授業の妨げになるからと生徒がいなくなると「ぶよぶよ」の駆除に取りかかった。すると生徒たちはそのソフトをどこかフォルダーの奥に隠した。「かくしても検索したら分かるもんね」といいながら生徒の前で駆除の作業をすると、生徒たちはファイルの名前をかえる「それでもみつげられるもんね」というと、こんどは不可視ファイルにする。あげくは自分のフロッピーディスクに「飼う」というように知恵をつけるようになる。いたちごっこというか生徒たちとの知恵比べが続いた。コンピューターリテラシーなんていうのは、このように身につけていくものなのだろうって、友人の教員に話したら、「それってハッカーをそだてているんじゃないの」といわれた。

わたしは「宗教」と「情報」というまったく正反対の性質の授業を担当したが、その授業では生徒の反応の仕方がまったく異なる。生徒との距離

感がまったく違うのである。「情報」の授業のほうがずっと心理的にも物理的にも生徒に近く、教える側にとっても教わる側にとっても精神衛生上とてもいい。

「情報」の授業では、分からないことがあるとすぐに手が上がる。「宗教」の授業ではこういうことはめったにない。「宗教」の授業では分かっているのか分かっていないのか自分でも分からない状態なのである。そしてそこに駆け付けると「ここに原因があつてうまくいかないんだ。こうしてご覧!」といってその通りにするとうまくいくことが圧倒的に多い。生徒は「やったー!」といって喜ぶ。この明快さはたしかに精神衛生上とてもいい。

パソコンを使った授業でよくトラブった。とくに1時間目が多い。わたしは大汗をかきながら、修復を行おうとする。生徒たちはやる事がなくて、どこから見つけてきたゲームを嬉々としてやり出す。ほとんどそのトラブル対策で1時間目は終わってしまうことが多かった。

あるいはとくに1時間目は、説明の仕方が悪いと一斉に手が上がり、その対応にかけまわることも多い。1学年4クラスあるので同じ授業を4回することになる。1時間目でうまくいかなかった部分は回を追うことによくできるようになり、4時間目はあまりにスムーズにいつて時間を余らせてしまった。

ところが不思議なことに生徒の修得度や上達度そして「情報」の授業をおもしろいと言ってくれる割合は、スムーズにいつた授業よりも、トラブったり説明がうまくできなかった授業のほうがいいというパラドックスが生じるのである。

### インターネットがやってきた

前置きが長くなってしまっているが、もうすこしつきあっていたきたい。

1994年の夏休み、忘れもしない8月15日の新聞を何気なく見ていたら、そこに「『インターネット100校プロジェクト』の対象校を募集中」の記事があった。インターネットのなんたるものかをほとんど知らなかったが、これがおもしろそうだという予感をもっていた。

夏休みがおわって授業開始の日、久しぶりに顔を合わせた情報教育委員会のメンバーに記事の切り抜きをみせて、これに応募しないかということ

を提案したら「わたしもまったく同じことを考えていた」といって彼も新聞の切り抜きをとりだした。同じことを考えていたひとがもうひとりいた。研究部長という役職にあったその教員のその一言は力強かった。

しかし会議でこのことを話し合ったときに、コンピューターやインターネットに詳しい人もいないのに、そんなおそれたことを引き受けて大丈夫なのかという不安が何人かからだされた。私たちに大丈夫という自信は全くなかったが、でもとにかく応募してみようということになった。

そしてどういうわけがあったのかよく分からないが、はれて「100校」の中に入ることができたのである。

わたしには、Macを入れたときと同じようなサポートが受けられるという予感があった。そしてその予感はあたった。「100校」の発表があって、まもなく対象となった学校の担当者たちと対象校とならなかった学校の教員や大学の教員や大学院生、学部の学生、コンピューター会社に勤める技術者たちが集まってKICE（神奈川教育とインターネット協議会）というグループができて、「100校」のサポートにあたることとなった。

この力強いサポートによって、学校のホームページが立ち上がった。県内の高校では確か2番目か3番目だったように思う。

学校のホームページに何を載せるかということが問題であった。ありきたちの学校紹介だけではおもしろくないと思い、わたしは自分の担任のクラスの学級日記を掲載することにした。生徒たちに許可を求めても、インターネットのなんたるかを知らない生徒たちには、どういうことなのか分からずにも何とか了承してくれた。もちろん生徒や教員の名前は書くことを控えた。当時はまだ珍しかったデジタルカメラを手に入れて、できるだけ写真も載せるようにした。内容はできるだけそのままを載せるようにした。学校や担任への不満などの感想が書かれてあってもそういうところも削除することはしなかった。

丹念にこの日誌を読んでいくと、この担任の学級運営のへたさ、生徒の人気のなさが読みとれるのだが、まあそれでもよしとした。むしろ生徒たちが学校生活をどのように楽しんでいるかということ伝えたかった。これがもっともよい学校紹介になると思ったからである。

この学級日誌をもっとも喜んで見ていたのは、外国や地方に単身赴任をしている生徒の父親だった。毎週を楽しみにしながら、写真の中に自分の

娘がうつっていないかを虫眼鏡を持って探していたという。

生徒たちに学校紹介のホームページを作るという課題に取り組んでもらったことがあった。これはとてもいい課題となった。自分の学校の特徴は何か、ほかの学校にはないウリは何か、それを探す作業は自分たちのアイデンティティを確認する作業となっていくのである。生徒の作ったいくつかのホームページをあるソフトウェアコンテストに応募したら、入選したということもあった。

シンプルなアニメソフトを使ってホームページ上でアニメを動かすという課題を与えたら、実に見事なアニメーションを作成した生徒もいた。

### メーリングリストがつくりだしたネットワーク

インターネットのはじめのころ、もっとも役に立ったのはメーリングリスト（ML）であった。「100校プロジェクト対象校のML」「KICE」のMLなど「情報教育」の分野だけでなく、各教科の教員たちのMLも構築された。わたしもそれに触発されて、「宗教」の教員たちのMLを1998年暮れに立ち上げた。わたしは1989年以来全国の『宗教』の教員に呼びかけて「宗教倫理教育担当者ワークショップ」という教員研修の場を8月に3泊4日で行っていた。教員の研修としてはもっともパワフルな研修であると自負しているが、今年2014年の夏は第25回目を迎える。

それまでは年1回の研修をとおしてつながっていたのだが、MLはその交流を日常的に行うことを可能にし、「宗教倫理教育担当者ネットワーク」が誕生した。そこでは授業実践の報告や教材の紹介などのとても役立つ情報が共有されていった。

教会やカトリックの信徒のMLを探したら、CJML（たしか日本のカトリック者のML）という大阪教区の司祭が管理人となっているMLをみつけた。そこにはいろいろなカトリックの信徒が集い、実に活発な議論が戦わされていた。そのMLで目立ったのはかなり年配と思われる人たちの復古的な発言が目立った。彼らは進歩的な意見の持ち主に「異端」という宣告をし、左がかった発言をする「正義と平和」派の司教さんたちをこき下ろした。「ネット右翼」とでもいうべき信徒たちがはじめて発言の場を得て日頃の鬱憤を晴らしている、そういう感じであった。実名や所属を明らかにしている人も多かったが、匿名やペンネームで書き込んでいる人も

多かった。

しかし、そういう人たちの暇に任せての書き込みが分量的には多くなるのが宿命なのであろうか。誹謗や中傷にあたる内容も少なくなかった。ここではとうてい「わかちあい」はできないなと思ったものである。

### インターネットでディベートをした

「100校プロジェクト」の実験として私たちが試みたことは「インターネットでディベートをする」というプロジェクトであった。家庭科の教員がこれに積極的で「100校のML」で呼びかけたら、東北学院という男子校がその呼びかけに応えてくれた。2年目からは対象校が4校に増えた。

そのテーマは、たとえば「専業主婦か共働きか」「離婚」「見合いか恋愛か」「妊娠中絶」などの家庭科的なシビアなテーマが選ばれ、その是非についてディベートをするというものである。肯定側、否定側がそれぞれメールで立論、駁論をメールで送り、またチャットソフトを使ってリアルタイムでの討論をした。それをネット上で公開し、審判員が判定するという仕組みになっていた。

2回目は4校入り乱れて20くらいの対戦が生まれ、それをネット上で公開するのがとても大変だった。

ほとんどはまじめにディベートをしていたが、なかには男子校の生徒が女生徒をからかったりおちよくったりしてまじめに応えてくれないという苦情もときどき聞こえたり、揚げ足取りに終始して気まずくなっているというディベートもあった。

学校を越えたネット上の交流はそれなりに新鮮な体験であったが、やはり実際にあつてするディベートもやろうということになり、仙台から東京に数人の生徒が来校して、清泉の生徒と向き合ってディベートをすることもあった。ネット上でのディベートを経験した後だったせいか実際にあつてするディベートはとてもきもちよいディベートとなった。やはり面と向かってするディベートのほうがいいねとみなで言い合っていた。

チャットで討論をするというのは、ほとんどキーボードを打つスピードがものを言っただけとなってしまった。相手の意見を聞かずにとにかくキーボードをたたき続けて自分の意見を言い続ける方が勝ちということになってこれも後味のあまりいいものにはならなかった。

### 病院のパソコン講座を高校生が教えるという夢

昼休みに休憩室で昼食をとっているときに、生徒がよくわたしを呼びに来た。コンピューターが動かなくなってしまったので見てほしいといいにくるのである。こういうときは食事が終わるまで待ってといて、食事を急いで済ませ、コンピューター教室に駆け付けると待っていた生徒が言った。「先生何だかともうれしそう。トラブルを治すのがそんなに楽しいの?」といわれてしまった。

わたしは「人が困っているときに助けられるということは自分を必要とされているとき。これはよろこびや生きがいに通じるものなんだよ。」って応えるようにしている。「あなたももし同じようなトラブルにあって困っている人を見かけたら、助けてあげられるようになるといいよ」というとうれしそうにわたしがやることを見てくれるようになった。

そういえば、こんなことを企画したことがある。高1にゼミの時間があって、生徒は開講されているゼミを自由に選んで参加することができる。

わたしは鎌倉市にある総合病院でケアマネジャーの仕事をしている大学時代の友人の協力を得てコンピューターを使ったある企画を立てた。それは病院のデイサービスや長期の療養中の患者さんたちを対象にパソコンとインターネット講座を、高校生たちをコーチにして開くという企画であった。すでにそういう講座は病院で開講されているのだが、どうも今ひとつ盛り上がらないで受講してくる人も少ないのだそう。もしそこで自分の孫のような高校生のかわいい女の子たちが教えてくれるというのならはりきって参加する人が増えてくるだろうとその友人も積極的にやろうと賛成してくれた。病院と学校でそれぞれ根回しをして、あと少しで実現にこぎつけられそうになったときに、その友人は急病で他界し、そのプロジェクトは頓挫してしまった。

人のために役に立つことをできるというよろこびと教えるものももっともよく学ぶというよろこびを一挙に体験できる最高のチャンスを逸したことはとても残念なことであった。

### チャットルーム

コンピューター教室でチャットがはやったことがあった。チャットとは見知らぬ人と文字でおしゃべりをするインターネット上の部屋である。多

くの場合、匿名でニックネームで呼び合ったりする。高校生の女子が20代の男になりすましておしゃべりをするということも珍しくはなかった

私たちには、それがどんなものでどういう危険性があるのかという認識がないうちに、生徒の間にあつというまに蔓延してしまった。

あるとき、学校にチャットルームの管理人と名のる人から電話があり、わたしにまわされてきた。「おたくの生徒とおぼしき人物が今チャットあらしをしていると思われるので、やめさせてください」という内容の電話だった。さっそくコンピューター準備室にいて、生徒のコンピューターをモニターしてみたところ、確かにやってる、やってる。そつとその生徒のうしろにいてしばらく観察していた。彼女はこんなことを書き込んでいた。「てめーら、昼ひなたからこんくだらねえことをしてやがって、ほかにやることねーのかよ」

それを確認してから、生徒にそつと聞いてみた「そういうことをしてどこが楽しいの?」と。生徒はあわてて画面を両手でかくしたのだが、もうおそい。「先生、どうしてこれが分かったの?」と生徒は聞いてきた。

「チャットルームの管理人という人が『おたくの生徒がチャットあらしをしている』って電話してきたんだ。」

「え～、どうしてここだっていうことがわかったのかな?」と不思議そうな生徒。

「ここに書かれている IP アドレスは、うちの学校であることを示しているんだ。だからどこからかきこんでいるかということは調べればすぐに分かることなんだ。そんなことも知らないでなりすましをやっていたというわけだ。まったく、ところでチャットでなりすましを試みず知らずの人とおしゃべりをするのどこがそんなに楽しんだ。学校の名譽をきずつけたペナルティとして、チャットをしているとき何が楽しいのかという心の動きをよーく見つめ直してわたしに報告すること、いいな」

彼女は別な人格になりすまして人を騙しているときに、ちょうど劇の主役を演じるときのような快感を感じるのだそうである。相手を騙すことに成功したときの達成感がたまらないといていた。実に危なっかしいゲームである。

「相手もなりすましているかもしれないよね。たぬきの化かし合いみたいなもんだ。そんなゲームが楽しいのかね。」

そのことがあって、わたしはコンピューター教室にできるだけいるようにして、チャットをしている生徒には「そののどこがおもしろいのかね」と問いただすことにした。

しかし、これが生徒指導部のしるところとなり「コンピューター教室は生徒の解放区みたいになっており、ゲームもチャットも放置しているのは問題である」ときつく注意をされ、そして翌年コンピューター教室の管理人と情報教育の担当をはずされてしまった。

そして次の担当者は、指導部の指導の下に、コンピューター教室で学校の勉強に関係のないことをすることを禁じるとして、ゲーム禁止、チャット禁止、メールの使用禁止など禁止だらけの教室となり、果てには教室に鍵をかけてコンピュータを使うときは鍵を借りに来ることになった。そしてコンピューター教室は閑散としてあの賑わいはなくなってしまった。

もっとも情報教育の担当をはずされたのには、別な理由があった。高校で「情報」という教科が始まるまえにある教科書会社から高校の「情報」の教科書を作るチームに誘われ、教科書の一部を実際に執筆をしたのだが、教科「情報」の教員免許の取得はできなかった。「情報」の免許取得コースへの参加は数学、理科、技術家庭など理系の教員に限られていて、社会科学と宗教科の免許を持つ私にはその受講資格が与えられなかったのである。

理系離れがすすんでいて、理系の教員があまり気味だから、そのリストラ対策としてこうなったという噂も耳に入ってきた。これはコンピューターは理系のものという古くさい観念にとらわれた教育政策の失敗であったと思っている。実際インターネットをもっともうまく活用しているのは、決して理系の教員ではない。数学の教員たちをもっとも下手くそで社会科学や英語科の教員たちがもっともうまいというのはおそらくどの学校でも共通していることではなかろうか。

### SIGNIS「教会とインターネット」セミナー

さて、学校での情報教育からはずれて、わたしの関心は「教会とインターネット」に移っていった。長い前置きが終わり、いよいよ本論に入る。

そのきっかけを作り出したのは、SIGNIS（カトリックメディア協議会）という教会内の国際組織の日本支部 SIGNIS Japan が企画する「教会とイ

ンターネット」セミナーの第1回目の講師としてわたしを指名してきたことだった。わたしが「宗教」と「情報」という授業を担当し、学校のホームページを立ち上げ、また「宗教教育担当者ネットワーク」を構築したという経歴が注目されたようであった。与えられたテーマは「インターネットが拓く新・福音宣教」であった。2003年のことである。SIGNISのそれまでの課題はビデオや映画などのメディアを使った福音宣教ということであった。SIGNIS Japanは毎年カトリック映画賞の選定という役割を担っていたが、ニューメディアの時代となってインターネットが視野に入ってきたというわけである。

### 教会ホームページの定点観測

私はそれからSIGNIS Japanのメンバーに加わり「教会とインターネット」部門を担当することになった。そこで最初に注目して調べたことは、教会ホームページであった。メンバーで分担して全国の小教区の教会のホームページを探し出し、おもしろくてよくできた教会ホームページを発掘しては、セミナーで報告した。教会でホームページを担当している人たちを集めて「ホームページ担当者交流会」に年2回開催されるセミナーの1回を当てることにした。4年に1回くらい全国の教会のホームページを検索して調べ、どのくらいの教会がどのようなホームページをもっているかを調査し、その報告を交流会で行った。

第1期の1995年から2000年くらいまでは、教会のインターネットやコンピューターに詳しい人が個人的に作るというケースが多かった。その技術者たちはホームページを立ち上げる技術は持っているものの、コンテンツ（中味）をどのように作るかについてはほとんど何も蓄積がなかった。彼らはそこで信仰に目覚めた。聖書を読み、司祭に話を聞き、キリスト教の案内を自分たちで作ろうとしたのである。ホームページは見栄えがよくなかったのだが、その中味はけっこう個性的でおもしろいものも少なくなかった。ただ、教会のうち向けの情報と外向けに発信する情報とが未分化のまま混在した。うち向けといっても教会のホームページを見られる環境にある人はまだほんの一握りしかいなかったときである。

2000年から2005年ほどは、これではまずいのではないかといって、主任司祭の指導の下に「公式ホームページ」になり、外部の業者に製作を依

頼る教会も増えてきた。初期のホームページ担当者の多くはホームページ製作から手を引いていくことになる。教会にホームページを担当する委員が任命され、そういう人が原稿を作って業者にアップするように依頼するという形が多くなってきた。見栄えははるかによくなったが、中味は公式的で面白みのかけるホームページとなり、更新の頻度が落ちてきた。内容も教会の外へ向けて発信するような内容になってきたが、教会の基本的な情報の広報という役割以上には広がらなくなった。

しかし、教会の入門講座を開講するときには、ホームページを見てやってきたという人がけっこう参加するようになった。

第3期が2005年ころから今であろうか。見栄えは格段によくなってきたが、更新の頻度が落ち、内容的にも乏しくなっていることと、外部の業者へ発注することへの経済的負担も大きくなってきたことを顧みて、更新だけは自分たちでしようという声が上がってきた。SIGNISではこの声に応じて「WordPressによる教会ホームページ制作支援」という活動を開始した。WordPressはフリーで流通しているブログ作成ソフトである。これを使ってブログスタイルのホームページを作ることを推奨し、講習会を開いたり、その教会に出向いて作成指導を行った。すでにホームページを持っていながら更新が止まっているところには、更新部分だけをWordPressでつくり、すでに出来上がっているホームページに組み込むことも行った。これには修道会のホームページの担当者の参加も多く見られた。

教会の態勢はホームページを制作する担当と中味を考える担当とが切り離され、中味を考える所には教会の広報部が関わるようになってきた。

そして現在、第4期である。おそらくパソコンでみる教会ホームページ離れが進行しているのではなかろうか。スマホやタブレットで見る人が多くなっている。その結果、ホームページは基本的な情報を載せるだけのシンプルなものとなり、それ以外の教会情報はFacebookへ移行していきつつある。教会の公式ホームページは味もそっけもないものになっていくだろう。教会が発信するというよりも信徒個人や信徒のグループが発信する量が増えていくと思う。

今後教会ホームページの存在感が薄れてくると思うのだが、信徒の信仰体験、一人一人の生き方、そして教会と地域との関わりについて、教会と

信徒が情報発信していかなければならないときに来ていると思う。それを発信するにはどのメディアがもっともよいのかを検討するときに来ているような気がする。教会の公式ホームページなのか、教会の Facebook なのか、信徒個人のブログなのか、信徒個人の Facebook なのか？ その所のメディアの特性を活かしながら使い分けていく必要があるだろう。

### キリスト教入門講座と「宗教」の授業で 蓄積したコンテンツを活用しなければ

わたしは自分の小教区で「キリスト教入門講座」を担当していたが、それはわたしが「宗教」の教員となる前の年から始まった。コロンバン会のグリフィン神父が藤沢教会で開設していた「キリスト教入門講座リーダートレーニングコース」を受講してこれなら自分にもできそうと思ってはじめた。「宗教」の授業で何をどのように学ぶかまったく蓄積のなかったわたしには、上智大学の神学講座で学んだことよりもこのトレーニングコースで学んだことの方が「宗教」の授業のためにはるかに役立った。

このグリフィン講座には横浜や湘南地方の教会の信徒たちが多く参加していた。そのおかげで横浜教区には信徒による入門講座が開設されている教会が多く、教会で洗礼を受ける人のかなりの部分はその「入門講座」から生まれてくる。ほかの教区では入門講座はほとんどが司祭や修道者によって開設されていて、信徒による入門講座はほとんど見られない横浜教区の特徴となっている。

わたしの小教区での入門講座は、途中参加者がなくて開店休業の時もあったが、それでも細々と25年以上続いている。はじめのころはグリフィン講座のテキストに忠実にそってすすめていたが、今ごろは自分なりの改良を重ねてグリフィン講座の原形を留めている部分は少なくなってしまった。

その一方、入門講座と学校での『宗教』の授業で積み重ねてきた福音的なコンテンツの豊かな蓄積がある。これを使ってインターネット上で「キリスト教入門講座」が展開できないかということのをわたしのライフワークであると思いつくようになった。

### ブログ「Good News Collection」

その準備として、わたしは2006年6月より「Good News Collection」というブログサイトを開設した。自分が学んだ福音（Good News）をインターネット上でシェアする（わかちあう）ことをめざし、最初の2～3年はほとんど毎日のように更新した。さすがに今はその更新の頻度は月に4～5回におちてしまったが、それでも今、内容のボリュームは1500ページを越え、毎日のアクセスは500くらいとなっている。

Good News といってもキリスト教や聖書のことだけとは限らない。毎日身の回りで発見する Good News をアップしているのだから、実に多様な福音情報を紹介している。

このブログを訪問する人の半分以上は実は Google などの検索で訪れる。あるキーワードを検索しているうちにこのブログに行き当たったというわけである。このブログはどうもクリスチャンの人が作っているらしいと感じてくれたらうれしいのだが……。

そしてそこからインターネット上の「入門講座」に結びつけばいいなと思っているのだが、肝心の「インターネット入門講座」はなかなか姿を見せてこないのである。

### インターネット入門講座の構想

インターネットで福音宣教を成功させる要件の一つは、インターネットで分かち合いが可能であるかということであると思う。メーリングリストのなかで、実名でお互いに顔も見知っているメンバーのクローズなメーリングリストなら分かち合いは可能であるが、オープンさをますほどに匿名性を認めるほどに実は分かち合いは難しくなり、ネット上で誹謗や中傷が飛び交い、挙げ句の果てには「炎上」という事態になりかねない。

わたしの入門講座は毎回1週間の振り返りと分かち合いからはじめる。参加者同士が分かち合いを繰り返してコミュニティを形作る。教材が配られてレポートを書いていく通信講座には、受講生同士の分かち合いはない。

わたしがインターネット上で開設することを考えている入門講座にも、この分かち合いが必須である。

まず最初に作業があったり、問いかけがあったり、あるいは文献を読んだり、ビデオを見たりした後に、一人で考える時間があって、そして自分

の応えを応答欄に書き込む。するとほかの人の書いた応えを読むことができ、そしてそれに対してコメントを書くことができる。このプロセスを終えると次のステップに行くことができる。いくつかのステップを終えると最後の「まとめ」があり、それを終えると次の集いにすすむ。

つまり、作業・問いかけ → 個人の振り返り → 応答 → わかちあい → 次のステップへ進む → 作業・問いかけ………ということの繰り返しとなり、最後は「まとめ」があって次の集いへすすむ。

だいたい次のようなカリキュラムをもっている。これはわたしが教会で行っているキリスト教入門講座のカリキュラムと同じである。

### 第1ステージ 自分との出会い、仲間との出会い

1. 出会い
2. 福音とわかちあい
3. 私たちは3つの世界に生きている
4. 感情
5. 楽しみと喜び
6. 怒りの心理学
7. 感動というたからもの
8. 自分が好きですか？
9. 自己受容
10. 時間
11. コミュニケーション その1 聞くこと聴くこと
12. コミュニケーション その2 私の中の3人の自分
13. コミュニケーション その3 誠実で率直ですなおな会話のために
14. コミュニケーション その4 自己主張 (Assertion Training)
15. フランクル「夜と霧を読む」

### 第2ステージ 聖書との出会い、キリストとの出会い

16. 現代人がキリストと出会う
17. 新約聖書が書かれた時代
18. ナザレのイエス

19. イエスの説いた「神の国」
20. 祈りについて その1 日本人の祈り
21. 祈りについて その2 祈りと黙想
22. 祈りについて その3 主の祈り
23. イエスの愛の教え 隣人とは誰か？
24. イエスの愛の教え 放蕩息子
25. イエスの愛の教え エロスとアガペ
26. イエスと弟子たち ペトロの場合
27. イエスと弟子たち ヨハネ, トマス, そしてユダ
28. 女たちのイエス
29. マリア
30. イエスの受難
31. イエスの十字架
32. 復活
33. 使徒たちの宣教
34. 旧約聖書とその時代
35. 天地創造
36. アダムとエワ
37. カインとアベル
38. ノアと箱舟
39. アブラハムの生涯
40. 族長物語
41. モーセと出エジプト, 十戒
42. ダビデ — 悔いなくおれしもの
43. 預言者たち その1
44. 預言者たち その2
45. ヨナとヨブ
46. 詩編を読む

### 第3ステージ 教会との出会い

47. 信仰をもって生きること
48. 洗礼

49. 聖霊
50. ミサと聖体の秘跡
51. 現代人の罪とゆるし その1 新しい倫理
52. 現代人の罪とゆるし その2 ゆるしの秘跡
53. キリストの教会 教会の歴史
54. キリストの教会 司祭, 司教, 教皇
55. 愛と性
56. 結婚
57. 生と死を考える その1
58. 生と死を考える その2
59. 現代人の救い
60. キリシタンの歴史 その1
61. キリシタンの歴史 その2
62. アシジのフランシスコ
63. 幸福・信頼・希望のつくりかた

結構なボリュームである。わたしが25年間にわたり教会で入門講座を継続してきた蓄積である。教会で毎週1回の講座でこれを行うとき、全部を終えるためには1年半から2年かかる。そんなに長くかかるのかといわれるが、多くの場合洗礼は全部終わってからではなく、途中で受けることになる。そのときは旧約の歴史の部分の後まわしにして、第三ステージを先にすることも多い。

コンテンツについてはこんなに蓄積があるのに、ネット上のプラットフォームが定まらず、未だ着工もしていない。いったいつになるのか。

### Facebook で福音宣教

2013年発行の「清泉女子大学人文科学研究所紀要」36号に「ソーシャル・ネットワークが拓く知と生き方の可能性」という「論文」を寄稿した。そのなかで Facebook は分かち合いを可能とするメディアであるとのべ、それが Social Learning (ソーシャルな学び) をつくりだしているということを紹介した。

それを受けて、ここではその Facebook を使った福音宣教とはどのような

に可能なのかを探ってみたい。ちょうど SIGNIS Japan は昨年（2013年）6月東京カテドラルで行われた第17回の「教会とインターネット」セミナーで「SNSと福音宣教」というテーマを取り上げた。そして2014年3月にはカトリック神戸中央教会で同じテーマの第19回セミナーを開くことになっている。

なぜ神戸でセミナーを開くのかというと、実は神戸近辺には Facebook や Twitter などのソーシャルネットワークをうまく使っているクリスチャンが多いからである。そういう方たちを招いてパネルディスカッションを開く予定になっている。

その中でもっとも効果的に Facebook を活用されているのが六甲教会助任のイエズス会士片柳弘史神父である。彼はほとんど毎日聖書の言葉とその短い解説さらには短い祈りとを発信する。そして彼は写真が実にうまい。これもほとんど毎日花の写真や鳥の写真、あるいは自分が行ったところの風景写真を掲載する。その写真にはときどき聖書の言葉が書き込まれていたりする。またローマ教皇のツイートを翻訳して掲載する。何れもとても短い文章である。

彼にはなんと 3725 人（2014年3月）の友だちがいて、何かメッセージを書くとすぐに 200～300 の「いいね」がつく。さらに彼の写真入りのメッセージは多くの人にシェアされて回覧されていく。

また片柳神父は音楽家のこいずみゆりさんと一緒に三宮のセントポールコーナーにてキリスト教入門講座を開設しているが、そこで話されたことの内容はすぐに Facebook Group にアップされて、欠席してもすぐに補うことができるようになっている。おそらくこの入門講座のかかなりの割合の受講者たちが Facebook 上の情報でこの講座に参加されているに違いない。

Facebook 上で流れる情報をよく見てみると、クリスチャンとそうでない人の発信する情報がかかなり異なっている点がある。一般の人の場合 Facebook に流れる情報は、ネコやイヌなどのペットのかわいい写真、自分の子どものかわいい写真、食べ物と食べ物屋の写真が圧倒的に多いのである。ところがクリスチャンの場合もちろんそういうのも少なくはないが、被災地へボランティアに来ているとか聖地巡礼に来ているとか、こんな本を読んだ、教会でこんなことをしたとかいう情報が多くなる。あるいは

はその人の生き方が鮮明に浮かび上がることも多いのである。

この違いがけっこう大きな影響を持つのではないかとおもえるようになった。つまり「生き方による宣教」である。自分もああいう生き方をしたいとあこがれをつくりだし、あのグループの中に加わりたくないと望みをつくりだしていく。

わたしも意図して福音情報を投稿していくようにしている。わたしの場合にはブログの方に記事を登録し、Facebook から私のブログにリンクを張るようにしている。また人の書いたものについて私のブログに関連した情報があった場合にはそのコメントの欄にリンクを張って、私のブログが呼び出されることになる。人の土俵に勝手に乗り込んでいって自分の相撲を取っているような気になって仕方がなかったのだが、これは多くの場合には嫌がられるよりも感謝されるほうが多い。

過去に投稿した原稿を呼び出したり検索したりするには、facebook よりもブログソフトのほうが格段に便利である。だからメッセージを蓄積していくためにはブログの方がいい。コメント欄に自分のブログの内容とリンクを張るということははられた方の本文のページを豊かにすることにつながるのだろう。こういう「響き合い」「共鳴のしあい」が福音宣教につながるのだと思う。

### 故人追悼サイト「悠（はる）かなる轍（わだち）」近日オープン

今、インターネット上に仕掛けてある試みが2つある。

一つは故人追悼サイトである。亡くなった人を偲んで親族や友人たちが写真やメッセージを自分の手でアップしていくことができるシステムである。人が死ぬとまわりの人は何かしらの悔いを持つ。もっと………しておけばよかったとかお礼を言わなければならないとかお詫びしなければならないことを言えなかったとかの悔いを残す。その悔いを埋めるためにもこのサイトは役に立つ。

アメリカやイギリスではすでに存在していて、けっこう多くの亡くなった人が登録されているという。日本でも昨今、故人の1周忌にあわせて、故人を偲ぶ本を出版することが多くなって要るという。この本は「葬式饅頭」になぞらえて「饅頭本」と呼ばれていてちょっとしたブームなのだそうである。これならけっこうニーズがありそうだこのサイトの構築に小

さな合同会社を作って取り組んだ。近々オープンする。

最初の提案は私のブログで2013年の2月今からちょうど1年前に行った。次のような内容であった。このブログはオープンまでは非公開となっている。

亡くなった方の追悼サイトというのはどうかな？すでにどこかにあるのかもしれませんが。

1. 故人の生前の生き方を紹介する。
2. 知人、友人たちからの故人についての思い出、追悼の辞、お世話になったことなどのエピソードを掲載できる。
3. 故人と一緒に撮った写真とか、も掲載できる。
4. エンディングノートを記入するコーナーを作る
5. 月命日、一周忌などのメモリアルデイについては、ミサをあげる、読経するなど、教会や修道会、神社やお寺などに祈祷を依頼できる。
6. 命日などのメモリアルデイの法事の案内をする。
7. こういうのは遺族の方々の結構グリーフケアにもつながるのではないかと思うけれど、どうだろうか？
8. facebookなどと連携して、記名してフリーに書き込みができるような構造が問題となりそう。
7. 命日などの故人のメモリアルデイに、故人が生きていた時に書いた手紙やメールを配信するサービスを行う。
8. 遺品整理をするコーナー 遺品を頒布するマーケットプレイスを併設する
9. 追悼集を電子出版したり、紙の本で自費出版することを手伝う。ちなみに業界用語では、こういうように1周忌に故人を記念して作る追悼文集のことを「饅頭本」というのだそう。まんじゅうというのは「葬式饅頭のこと？」って聞いたらそうだと書いていました。
10. 葬儀屋さん、火葬場、仏壇販売業、墓地、宗派を超えた宗教団体などを巻き込めたら繁盛しそうな気がするけれど。

「宗教」を超えてできたら、NPOとしてもできたらと思うけれど。福音宣教にもなるとおもうし、グリーフケアと結びつけたら、けっこうニーズがありそうだと思うし、ひょっとすると広告などを上手く

載せられたら利益が出るのかもしれませんが。

どこかの葬儀屋さんが、こういうサイトを作っていそうだけれど、見つけたら教えてください。

ちなみに、友人の葬儀屋さんに「こういうサイトを作るのはどうか？」って聞いたら、「死者は葬らなければいけないのです。そんなところで生きているように見せかけるのはいけないことです」って反対されました。

その後この話は次のように発展している。

1. 宗教色について 宗教性を脱色して作ろうとは思わない。むしろ宗教性を打ち出したい。ただしキリスト教だけの色に染めるのではなく、仏教の僧侶やプロテスタント、神道の神官などの宗教者と一緒に行い、無宗教もありというようにする。
2. 実は亡くなってから追悼されるよりも亡くなる前に追悼されて、感謝と讃辞に送られる方が幸せではないかと思うようになった。生きているうちに顕彰できるようにもする。こうするとなるとこれは「終活」支援サイトになるのではないか。
3. 有料のサイトにする。ただし親族や友人が自分で文章や写真をアップするのだから、請求できるのは初期設定料とサーバーのレンタル料維持管理料の年払いくらいではないか。
4. 最初に無料で体験できるおためし期間を3か月くらいつくり、4か月から課金が始まるというようにする。
5. このサイト構築を担当してくれたSEは韓国人であった。彼はこの4月に国に帰るといふ。つまり韓国でもこのサイトを開けるということである。そこもおもしろい。

ともかく4月にオープンの手配である。どういうふう宣伝するのかということも今思案中であるが、どんな結果が出るかハラハラドキドキしながら完成を待っている。

### **Meditation & Sharing (瞑想と分かち合い) のサイト構築構想**

もう一つの試みは、Meditation & Sharing (瞑想と分かち合い) のサイト構築である。カトリック教会には黙想の伝統がある。これに分かち合い

の要素もセットにして黙想と分かち合いをネット上でできるようにする構想である。これはまだ構想にとどまっていて、実現はまだ先のことであろう。

これを作る一つのきっかけは、私もそのスタッフを務めている「カトリック学校に奉職する教職員の養成塾」が毎年暮れに行っている合宿での体験であった。ここでは「教員になったきっかけ」とか「自分に影響を与えた先生」とか「生徒との関わり」「同僚との関わり」「これからどういう教員になりたいのか」という5つのテーマが与えられ、スタッフの一人が自分の場合をプレゼンテーションし、その後1時間の沈黙のうちの振り返りの時間をへて、6～7人のグループで1時間分かち合うという作業をテーマごとに5セッション行うというものであった。これがとてもいい作業であったのである。

さらにもう一つのきっかけは、鎌倉の十二所にあるイエズス会黙想の家が去年大幅に利用者を減らしたことにあった。実は東京の上石神井にあった黙想の家が新築オープンされたからそちらのほうにお客さんをとられたために、新規の利用者を掘り起こす必要性に迫られることとなった。存続の危機に立ったのである。黙想の家の最大の利用者は修道女であったのだが、高齢化と召命の現象によってシスターの数も減少しているのも、早晩何とか手を打たなければならないことは目に見えていた。そこで、クリスチャンでない一般の方々はこの黙想と分かち合いを体験する場として利用してもらうという方針が浮上してきたのである。

さらに十二所の黙想の家で黙想指導を専門にしていた英隆一朗神父が東京のイグナチオ教会に転出するという事になった。私は英神父に、イグナチオ教会の立地を活かしてサラリーマン向けの朝の「瞑想と分かち合い」のコースを開設するのはどうかと提案した。おいしいパンとコーヒーの朝食サービスもつけてできれば申し分ない。たとえば丸の内では朝大学が開かれていて、サラリーマンが多く参加していてちょっとしたブームだという。

この「朝の黙想と分かちあいのコース」「週末の泊まり込みでするコース」そして「ネット上で展開するコース」が有機的に結びついたならば、相乗効果をもたらすに違いないと思う。

これも宗教色が問題となるであろう。聖書の黙想のようなキリスト教色

の濃いコースもあれば、宗教色のない黙想のテーマも多数用意して、これも参加者が自由に選べるようにしたらしい。キリスト教色を押しつけることは逆効果であるだろう。

### 書き終えて思うこと

前半は、個人的な体験の披瀝、後半は夢みたいな話を展開し「学術論文」とはほど遠いものとなってしまったことをお詫びしなければなるまい。何年後かにこの構想がどうなったかを報告する説明責任があると思っている。

あらためて書き連ねてきたことを読み直してみると、私はこれがどうしても自分の能力と努力でできたものとは思えないのである。幸運に恵まれていたというよりも、何か大きな力に引き寄せられてここまで来た、そしてこれからもそうだろうと思っている。

そしてもう一つ感慨深いのは何というおもしろい時代を生きてきたことかということである。時代の波に翻弄されながらも、ほんのちょっぴりではあるけれど、どこか未来を予感する力が私の中にあったという自負もある。

「学術論文」とはほど遠いものとなってしまったけれど、私は書き終えてとても満足している。